

氏 名	しみず あいこ <b>清 水 愛 子</b>
学位(専攻分野)	博 士 ( 学 術 )
学 位 記 番 号	博 甲 第 3 6 6 号
学位授与の日付	平成 16 年 9 月 24 日
学位授与の要件	学位規程第 3 条第 3 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科 機能科学専攻
学 位 論 文 題 目	<b>京都近代陶磁史に関する研究</b> <b>-明治・大正期における「意匠改良」活動を中心に-</b> (主査)
審 査 委 員	教授 太田喬夫 教授 並木誠士 教授 中川 理

## 論文内容の要旨

本論文は、京都における明治・大正期の陶磁器の「意匠改良」活動を再検討し、その意義を再評価することを目的としている。これまで近代陶芸史は、しばしば近代の芸術家としての陶芸家の個性を表現した作品の成立・展開として述べられてきたため、明治・大正期の「意匠改良」活動は紹介されても、その詳細な実態の研究や正当な評価は不十分であったといえる。本論文では、「意匠改良」活動に関わった人々を、立場の違いにより三つに分け、それぞれの立場からの実情と意義が多角的に検証される。ひとつは、西欧の新しい図案、デザインをモデルに、陶磁器の古い意匠を変えていこうとした指導者たちの立場。もうひとつは、日本画による図案を伝統として受け継ぐと共に、西欧の近代の図案をも併せて取り入れていく専門の図案家の立場。最後に、江戸時代から続く京焼の窯元、製陶家の立場である。

本論文は、「序」および第一部、第二部、第三部の三つの部、そして「結論」からなる。「序」では、研究の目的、独自の視点、そして主な先行研究について述べる。「序」では、特に江戸時代から明治にかけての連続性ないし過去の伝統が強調される。また、京都の明治期の陶磁史の独自性が、東京や他の産地との比較のうえ概観される。

第一部 図案指導者が目指した「意匠改良」－中沢岩太・浅井忠・武田五一の図案指導  
第一部はさらに各指導者ごとの活動が三つの章に分けて論じられる。ここでは、陶磁器そのものの制作に関わっていた人々よりも、洋画家や建築家らによる活動が中心となる。団体 遊陶園と競美会の関係、その性格の違いが、例えばアール・ヌーヴォーに対するとらえ方の違いとして解明される。

### 第二部 図案家としての「意匠改良」－神坂雪佳の活動

第二部はさらに「意匠改良」以前の神坂雪佳、競美会と神坂雪佳、工芸プロデューサーとしての活動が、三つの章に分けて論じられる。ここでは、専門の図案家としての雪佳が行った陶磁器の意匠改良の実態の解明と江戸の琳派の図案の新たな受容ないし引用の解明が中心となる。また、西欧のデザインを一つの文様パターンとして受容するありがたが特色としてあげられる。さらに工芸プロデューサーとしての雪佳の側面が強調される。

### 第三部 製陶家からみた「意匠改良」－清水六兵衛が受けた影響

第三部はさらに作品に見られる「意匠改良」の影響、製陶環境の変化、それに陶磁器界から見た「意匠改良」の意義が、三つの章に分けて論じられる。ここでは、京焼の窯元、製作者の立場からの「意匠改良」活動が中心となる。特に時代による製作環境の変化が、意匠の改良と密接に関係していたことが強調される。具体的には歴代六兵衛の作品意匠と「意匠改良」に関与した五代六兵衛の作品意匠の比較分析がなされる。

「結論」では、これまでの論文の展開の趣旨と成果、および問題点・今後の課題などが要約される。

## 論文審査の結果の要旨

従来の日本の近代陶磁史研究は、主に、西欧近代の純粹美術やデザインの概念に価値目標をおいて行われてきたといえる。この立場からは、京都の明治・大正期の陶磁の「意匠改良」活動は、「芸術としての陶芸」が成立する前段階、準備段階として低く評価されがちであった。これに対し、本論文は、江戸時代の琳派の意匠や伝統的な陶磁器の製作システムが、一面において、明治・大正期において、なお、大きな力を有していたことを文献資料の読解と作品分析、それに京焼の窯元へのヒアリング調査等によって解明した。この点、高く評できる。

「意匠改良」活動を、立場が異なる三人を代表させ、それぞれの立場からの「意匠改良」の実態と意義を解明しようとしたことは、従来の直線的な歴史記述にはない、立体的、有機的な特色を研究に与えた点、注目に値する。

また、浅井忠や武田五一らの「意匠改良」活動のいわば、受容史の一形態として、彼らの西欧近代デザインに基づく「図案」は、図案家の神坂雷佳や製陶家の五代清水六兵衛においては、近代の芸術家による個性の表現としての意匠としてよりも、時代の流行を敏感に反映した文様パターンのひとつとして受容されていたことを明らかにした。この点も評価することができる。

さらに「意匠改良」活動が、単に陶磁器の造形上の改革にとどまらずに、製作システムや作品の展示・販売とも密接に関連したものであることを、工芸のプロデューサーとしての神坂雪佳の活動や高島屋の百貨店で陶磁器の展示即売会をはじめて開いた五代清水六兵衛の活動の解明によって明らかにした。この点も注目に値すると評価した。

本論文の内容は、学会誌の査読論文2編(下記①と②)および論文③として公表されている。

① 清水 愛子 「工芸の近代化における建築家の役割についてー武田五一の図案指導(マルホフ式図案)をてがかりにー」

建築史学会誌『建築史学』39号、2-13頁(2002)

② 清水 愛子 「神坂雪佳と競美会ー近代京都の陶芸史の一考察ー」

意匠学会誌『デザイン理論』42号、1-14頁(2003)

③ 清水愛子「工芸の革新をめざした図案家、神坂雪佳ー競美会における陶磁器をてがかりとしてー」

図録『神坂雪佳展』(京都国立博物館・バーミングハム美術館・朝日新聞社)所収、281-285頁(2003)